

地域課題解決学習による児童の挑戦する意欲と社会的有効性意識の向上

—— 総合的な学習の時間のマネジメントと授業実践を通して ——

大林正史*, 前田彩子**

(キーワード: 総合的な学習の時間, 地域課題の解決, 挑戦する意欲, 社会的有効性意識, マネジメント)

1 研究の目的

本研究の目的は、小学校において教師が地域の課題解決を主な内容とする総合的な学習の時間のマネジメントとその授業実践を行うことが、児童の挑戦する意欲と社会的有効性意識に与える影響を明らかにすることである。本稿では、「総合的な学習の時間のマネジメント」を、「A校の教職員や地域住民、児童に対する総合的な学習の時間における目標の明確化と共有、カリキュラム改善、実施、省察を促す働きかけ」の意味で使用する。また、「社会的有効性意識」を、「地域や社会に積極的に参加し、影響を与えることができるという意識」(木村・中原2012:73)の意味で使用する。

2022年現在の日本には、人口減少、相対的貧困率の増加、世界のGDPに占める日本のシェアの低下など、社会の変革を要する重要な社会的、経済的問題が山積している。しかし、日本の17歳～19歳は、米国や中国、韓国の17歳～19歳に比べて、「自分で国や社会を変えられると思う」との質問に対して否定的な回答が多いことが明らかにされている(日本財団『18歳意識調査』「第20回-社会や国に対する意識調査」2019年)。このことは、日本の若者は社会参加志向を構成する因子の内、「社会的有効性意識」(木村・中原2012)が低いことを示唆していると考えられる。

自分の力で社会を変えられないとの信念を有する国民が多いほど、また、課題に挑戦する意欲の低い国民が多いほど、その国の政府や市民による社会的、経済的問題の解決は機能しにくくなるであろう。よって、日本の民主主義や市民社会をより十全に機能させることを通して、山積する社会、経済の問題をよりよく解決するためには、学校教育で児童の「社会的有効性意識」や挑戦する意欲を意図的、計画的に高めることが重要であると考えられる。

社会的有効性意識を高める教育方法については、サービスラーニング(以下、SL)の有効性が明らかにされている。SLとは「思慮深く組織されたサービスの経験への活動的な参加を通して、若者が学習し成長することを目標に置いた一つの教育方法」である(唐木2010)。木村・中原(2012)は、大学生が社会の課題を解決するSLに取り組むことにより、彼らの社会的有効性意識が高まることを解明している。また、大林・近藤(2021)は、中学生が地域の防災活動をテーマとするSLに住民と共に取り組むことにより、彼らの社会的有効性意識が高まることを明らかにしている。しかし、小学生が地域の課題を解決する学習を行うことが、彼らの社会的有効性意識に与える影響は未だ明らかにされていない。

以上の問題意識から、本研究では、ある小学校において教師が地域の課題解決を主な内容とする総合的な学習の時間のマネジメントとその授業実践を行うことが、児童の挑戦する意欲と社会的有効性意識に与える影響を明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

本研究は、前田が鳴門教育大学の教職大学院にて現職院生として置籍校であるA小学校において、2021年度に実習として実践してきた実践研究の成果(最終成果報告書)の一部に加筆修正を施したものである。大林は、前田の主指導教員として、この実践研究の指導・助言に従事してきた。大林は、この実践研究の成果を踏まえて

*鳴門教育大学学校づくりマネジメントコース

**徳島市新町小学校

本稿を執筆している。2021年度のA小学校の児童数は約180名であった。

前田は、2020年10月に、学校と連携して活動してきた住民8名（老人会代表、校区のホタルの保全活動をしている住民団体の代表、学校評議員、地域包括支援センター職員、公民館主事など）による地域ビジョンを作成するためのワークショップを開催した。その結果、地域の住民同士の交流が減っていることを踏まえ、目指す地域の姿を「住民が集い共に活動できる地域」とすることになった。

また、前田は、2021年1月に佐古（2019）の学校組織マネジメントの方法論を参考に、教職員13名による総合的な学習の時間のビジョンを作成するためのワークショップを開催した。その結果、A小学校の児童の中心的課題は「自分の力でできた達成感の不足」とされた。それを踏まえて、A小学校の総合的な学習の時間でめざす児童の姿（育成課題）は「つながり・学び・高め合う～自分と仲間を信じ、『やってみよう』を実践できる児童～」とされた。

これらのことから、前田は、2021年度に地域の課題解決を主な内容とする総合的な学習の時間のマネジメントとその授業実践を行うことを通して、「やってみよう」を実践できる児童を育成することを実践研究の課題とした。

前田は、自らの実践が児童の「やってみよう」を実践できる程度の変容に与える影響を測定するために、青木・中島（2011）の向上心尺度のうち、「意欲」と「やる気」の下位尺度で構成された質問紙調査を、2021年の3月（2年から5年生、計120名対象）と11月に実施した（3年から6年生、計121名対象）。この質問紙調査は、前田が自らの実習における実践が児童個人に与える影響を明らかにすることを通して、その児童への支援の在り方を考察するために、記名式で行われた。

本研究では、A小学校の児童の中心的課題は、「自分の力でできた達成感の不足」であったことを踏まえ、向上心尺度のうち、次の4つの質問項目の回答により、児童の「やってみよう」を実践できる程度、言い換えれば「挑戦する意欲」の変容を測定する。それらの質問項目は、①「いろいろなことに挑戦してみたい」、②「難しいことでも自分の力をせいっぱい出して頑張ってみようと思う」、③「やろうとしたことは何でも一生懸命やりたい」、④「うまくいかどうかは気にしないで一生懸命がんばりたい」の4点である。

また、大林は、既述の問題意識に基づき、4～6年生に対して「社会的有効性意識」（木村・中原2012）を測定する質問紙調査を行うことを前田に依頼し、了承を得た¹⁾。木村らの「社会的有効性意識」を構成する質問項目は、大学生を対象にしたものであったため、小学校教師である前田と協議して、回答の負担を軽減するために質問項目を精選した上で、小学生にも回答しやすくするために、質問項目の文言を修正した。そうして作成した質問項目は、①「私は、地域の問題を解決していくことができると思う」、②「私は、地域の人々の暮らしを良くするために大きな役割を果たすことができると思う」、③「私は、地域の人々の暮らしを変えていくことができると信じている」、④「もし私が、世の中を少しでも変えることができれば、より正しい世の中にあることができると思う」、⑤「多くの方は、地域の問題を解決していくことができると思う」、⑥「私はよく未来の世界をよりよいものにするためにはどうしたらよいか考える」の6点である。この質問紙調査は、A小学校の4～6年生（86名）に対して、2021年6月と、2022年2月に実施された。この質問紙調査は匿名で行われた。

これらの2つの児童に対する質問紙調査について、A校の児童や関係者が不利益を受けないように研究倫理上の配慮を行った。具体的には、得られたデータを厳重に管理し、研究目的以外には使用しないことや、論文等で使用する際には、個人名や学校名を匿名化し、個人が特定されないようにすることなどの配慮を行った。

社会的有効性意識に対する調査の対象を4年生から6年生としたため、以下では、主に4～6年生に対する総合的な学習の時間のマネジメントや授業実践、それらによる児童の変容について記述する。

3 総合的な学習の時間のマネジメント

(1) ワークショップの開催を通じた総合的な学習の時間のカリキュラムの改善

2020年10月の住民によるワークショップでは、「住民が集い共に活動できる地域」の姿を実現するために、地域と学校が一緒にできることについて、「3世代が交流できる場や行事をつくる」「A保育所跡の利用について考える」「子どもが3世代をつなぐ活動をする」などのアイデアが出された。

2021年1月のワークショップでは、A小学校の教職員が、「やってみよう」を実践できる児童にしていくために、A小学校の教職員の取り組みの柱の案を、「学校と地域が一緒にできること」および「学校でできること」の2つの観点で出し合った。

「学校と地域が一緒にできること」については、教職員が、①「地域に貢献できる活動を子ども達が計画する」、②「活動を地域へ周知する」ことに取り組むことになった。「地域に貢献できる活動を子ども達が計画する」ことの実例としては、「独居老人の方との交流」「A地域のパンフレット作り」「校区にある動物園のPR」などといったアイデアが出された。

「学校でできること」については、教職員が、①「子どもが授業の目標（めあて）を理解してその振り返りができるようにする」、②「活動の中で見られた成果を認め、教師や仲間が褒めたり励ましたりする機会をもつ」、③「学習発表の場を設ける」ことに取り組むことになった。

2021年2月に、A小学校の全教職員13名は、上記の2つのワークショップで出された「地域と学校が一緒にできる具体的な活動」を、A小学校の総合的な学習の時間にどのように組み込むかを協議した。その結果、2021年度のA小学校の4～6年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、2020年度から以下のように変更されることになった。

1) 4年生の総合的な学習の時間のカリキュラムの改善

2020年度のA小学校の4年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、「ホタルのいるまちづくり」をテーマに、「パソコン力アッププロジェクト（30時間）」「ホタルのいるまちづくり（40時間）」で構成されていた。「ホタルのいるまちづくり」は、「ホタルについての調べ活動」「Aの川の水質調査」「Aの川の生き物調査・川遊び」「カワニナの放流」「ホタルやカワニナについてさらに知りたいことを課題として設定し、調べ、まとめる」で構成されていた。

このように、2020年度のA小学校の4年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、主に、「パソコンの使用」、「ホタルについての調査」や、「住民によるホタルを増やす活動の手伝い」といった学習活動で構成されていた。

それに対して、2021年度の4年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、同じく「ホタルのいるまちづくり」をテーマに、「ホタルについて調べよう（20時間）」「地域の川の様子を探ろう（15時間）」「ホタルのいる町づくりのために（35時間）」で構成されていた。2021年度には、2020年度の「ホタルのいるまちづくり（40時間）」での学習活動に加え、「環境を守るための活動を考えて実行する」「ホタルを増やすための活動を考え、実行する」「地域の人にホタルへの関心を高めてもらうための活動を企画する」といった学習活動が計画されていた。

このように、2021年度のA小学校の4年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、児童が地域の川やホタルのことを知るだけでなく、住民（校区におけるホタルの保全活動をしている住民団体の住民）とともに、地域の環境を守り、地域のホタルを増やすという地域の課題に、実際に取り組むことに重きを置く学習活動で構成されていた。

これらのことから、2021年度の4年生の総合的な学習の時間のカリキュラムにおける、児童が地域の課題の解決に取り組む程度は、2020年度のそれに比べて、強まったと言える。

2) 5年生の総合的な学習の時間のカリキュラムの改善

2020年度のA小学校の5年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、「食からのちを見つめよう」をテーマに、「食で人とつながろう（10時間）」「命を育てて食べよう（40時間）」「地域と食のつながり（10時間）」で構成されていた。具体的には、「地域の生産者に学ぶ」「市の食文化」「餅米と野菜を作って食べよう」「1年生とのおいもパーティ」「地域の市での販売をお手伝いしよう」といった学習活動で構成されていた。

このように、2020年度のA小学校の5年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、主に、地域の食のことを知ったり、地域の食を作って食べたり、その販売の手伝いをするといった学習活動で構成されていた。

それに対して、2021年度の5年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、「いのちをみつめよう」をテーマに、「地域の動物園を、たくさんの人に楽しんでもらえる場にしよう（15時間）」「地域の動物園をPRする方法を考えよう（20時間）」「ポスター作り・イベント準備・練習（20時間）」「来年の縦割り班遠足でもできるイベントに改良してみよう（15時間）」で構成されていた。具体的には、「ニーズ調査」「学芸員の方に聞き取り、講話、見学」「いろいろな世代の人が楽しめる案を出し合って話し合い、改良」「動物園の方にプレゼンテーション。助言をもとに改善し、再度プレゼン」「対象者に向けてPR実践。イベント参加者へアンケート」「実践を通して感じた成果と課題」などといった学習活動で構成されていた。

このように、2021年度の5年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、児童が、「住民が集い共に活動できる地域」にするという課題を解決するために、学芸員とともに、いろいろな世代の人が動物園を楽しめるように

する企画を立案し、実行することに重きを置く学習活動で構成されていた。

これらのことから、2021年度の5年生の総合的な学習の時間のカリキュラムにおける、児童が地域の課題の解決に取り組む程度は、2020年度のそれに比べて、強まったと言える。

3) 6年生の総合的な学習の時間のカリキュラムの改善

2020年度のA小学校の6年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、「未来創造の旅」をテーマに、「出発～旅の支度～(24時間)」「途中～人との出会い～(28時間)」「帰還～新たな旅へ～(18時間)」で構成されていた。「出発」の内容は、「20年後の自分を想像しよう」「仕事体験をしよう」「仕事調べをしよう」であった。「途中」の内容は、「ゲストティーチャーさんのお話を聞こう」「尊敬する人物や憧れの人を調べよう」「マイビジョンブックを作ろう」であった。「帰還」の内容は「自分の成長を振り返ろう」「今の自分を見つめよう」「自分の未来像を描こう」「マイビジョンブックを仕上げよう」であった。

このように、2020年度のA小学校の6年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、児童が自らの過去を振り返ったり、将来の仕事を調べたりすることを通して、自らの将来の方向性を定めることに重点が置かれていた。

それに対して、2021年度のA小学校の6年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、「私の未来・Aの未来創造」をテーマに、①「住民が集い共に活動できる地域にするためにオープンスクールでイベントをしよう(20時間)」、②「自分たちにできることからやってみよう(30時間)」、③「自分やAの未来像を描こう(20時間)」で構成されていた。①の内容は、「ニーズ調査(家族、他学年)」「自分達でできることを提案。他のまちづくり協議会の人にインタビュー」「A社会福祉協議会にプレゼン」である。②の内容は、「助言をもとに改善し、再度プレゼン」「自分たちにできることを精査し、地域の人と共に活動する」「イベント参加者へアンケート」である。③の内容は、2020年度の「帰還」の内容とほぼ同じである。

このように、2021年度のA小学校の6年生の総合的な学習の時間のカリキュラムは、児童が、「住民が集い共に活動できる地域」にするという地域の課題を解決するために、オープンスクールなどで行う企画を立案し、実行することに重きが置かれていた。

これらのことから、2021年度の6年生の総合的な学習の時間のカリキュラムにおける、児童が地域の課題の解決に取り組む程度は、2020年度のそれに比べて、強まったと言える。

(2) 総合的な学習の時間のマネジメントの展開

1) 教職員による地域でのフィールドワーク研修の開催

前田は、2021年4月1日の職員会の後に、教職員が地域を知ることを促すため、全教職員による地域でのフィールドワーク研修を開催した。前田は、地域の歴史研究者による出版物をもとにレジユメを作成した。教職員は、その内容の説明を受けながら、地域の建造物を見学した。この研修により、教職員は、地域の素材をどの学年のどの学習に生かすことができるかを提案し合うことができた。前田は、年度初めにこの研修を行うことは、教職員が各教科等の年間計画を立案する上で、大変意義があったと考えた。

2) A小学校の総合的な学習の時間の全体計画の作成

2021年4月に作成されたA小学校の総合的な学習の時間の全体計画における、「本校の目標」欄には、「つながり・学び・高め合う～自分と仲間を信じ、『やってみよう』を実践できる児童の育成～」と記されている。「児童の実態」欄には、「もうこれでいいやと諦め、自分の力だけでやりぬいた経験が少ない」と記されている。「地域・保護者の実態」欄には、「3世代の住民が共に活動できる機会をつくることが課題」と記されている。このように、2020年10月の住民によるワークショップと、2021年1月の教職員によるワークショップでの決定事項が、2021年4月のA小学校の総合的な学習の時間の全体計画に反映されていた。

2021年4月に、前田は、2017年に告示された小学校学習指導要領解説の総合的な学習の時間編や、2020年3月に出された「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 小学校 総合的な学習の時間」をもとに、A小学校の総合的な学習の時間の全体計画における、学年ごとに育成をめざす資質・能力をまとめた。例えば、4年生と5年生の「学びに向かう力・人間性等」の欄には、「人や社会、自然などに主体的、創造的にかかわり、友達と協力しながら最後まであきらめずに追及や表現、実践することができる」と記されている。

これらのことから、A小学校の総合的な学習の時間の全体計画においては、「児童の実態」を踏まえて「本校の目標」が設定されていたと言える。また、「本校の目標」と、学年ごとに育成をめざす「資質・能力」が、明

確に関連づけられていたと言える。

3) 単元計画の作成

2021年4月に、前田は、総合的な学習の時間の先進校の実践を参考に、「知る、考える、創る、伝える、省みる」学習活動を組み込んだ各学年の単元計画を作成した。児童の思考や興味・関心に応じた学習活動にするために、大まかな学習の流れだけを計画した。各担任と児童が、話し合いをしながら、学習計画を、学習の進捗状況に合わせて柔軟に変更できるように配慮した。

4) 各担任と住民との打ち合わせの促進

前田は、各担任と、住民との打ち合わせ事項を協議した。その後、各担任と前田は、2021年の5月と10月に、学年ごとに、ゲストティーチャーである住民を訪問し、授業の「ねらい」「役割分担」「児童の実態」「授業の流れ」について打ち合わせを行った。前田は、児童の目標と、地域の目標の両方を達成するための授業の構想を住民に提案した。前田は、住民が自らの考えを積極的に出せるように配慮した。住民は、各分野の専門家の立場から、児童の目標や、各単元のねらいに合った学習内容を提案した。

5) 実践交流研修の開催

2021年6月と8月に、前田は、佐古(2019)の学校組織マネジメントの方法論を参考に、各担任と前田による実践交流会を開催した。まず、「つながり・学び・高め合う～自分と仲間を信じ、『やってみよう』を実践できる児童～」に関する各学年の児童の実態、総合的な学習の時間における教師の手立て、今後の課題について、各担任から聞き取ったことを、実践ミニレポートにまとめた。そのうえで、各担任と前田が、6月10日と8月30日に集まり、互いの実践とそれによる児童の変容、課題を語り合った。

A小学校は、各学年が単学級で構成されているため、担任が一人で総合的な学習の時間を計画し、実践しなくてはならない。しかし、前田は、この実践交流会により、互いの教育活動を共有し、参考にしあったり、昨年度より前に担任した経験から活動のアドバイスをしあったりする場をもつことができたと考えた。

6) 総合的な学習の時間だよりの作成、配布

6月26日と7月19日に、前田は、総合的な学習の時間の目標や、その時間における児童の活動内容を保護者に知ってもらうため、実践ミニレポートを通信の形に編集しておして配布した。授業に協力いただいた住民にも、それを郵送した。このようにして、保護者や住民に対して、住民によるワークショップで決めた地域の目標をめぐり、各学年の児童が活動している様子を周知した。

7) 校内における掲示物の作成

前田は、総合的な学習の時間の授業において、児童が住民から学んだことや、児童に目標として意識してほしいことを廊下に掲示した。前田は、児童が、その掲示をみて、他の児童の感想を読む姿を見た。前田は、掲示板を見た児童が、他の学年の児童が総合的な学習の時間で取り組んでいることに興味をもって、自らの学習活動と比べていると考えた。また、掲示板を見た児童が、上学年の学習活動を知って、次年度の活動に期待をもつようになったと考えた。

前田は、養護教諭から、掲示された総合的な学習の時間の取り組みを見て、その取り組みに登校しにくい児童と話すきっかけにしていることを聞いた。また、家庭科専科の教員から、掲示されていた「SDGsの住み続けられる町づくり」の取り組みを見て、それと家庭科の授業を関連させることにより、総合的な学習の時間と家庭科の教科横断的な指導をすることができたことを聞いた。

これらのことから、前田は、これらの掲示の取り組みが、児童や教員による各学年の総合的な学習の時間の内容に関する理解を深めたと考えた。

4 総合的な学習の時間の授業実践の展開

(1) 4年生に対する授業実践

A小学校の校区では、住民の団体が継続的にホテルの保全活動をしてきた。A小学校の4年生の児童は、「ホ

タルのいるまちづくり」というテーマで住民と共に学習活動に取り組んだ。2020年度からの年間計画の主な変更点は、児童が住民とカワニナの放流をする前にホタルや環境について学習し、自然を守ることにに対する意識を高めることである。

2020年度には、住民が児童に対して、ホタルについて講義を行った。それに対して、2021年度には、1学期に児童がホタルについて調べ学習を行った。その際、教師は、国語科の新聞づくりや、社会科、理科の環境学習と関連させながら、児童の調べ学習を指導した。教師は、2学期には児童がホタルの住みやすい地域にするためにできることを考え、住民と共に活動することを通して、より地域との関わりを深めることを計画した。

1学期には前田がT1、4年生担任がT2として、2学期には4年生担任がT1、前田がT2として、総合的な学習の時間の授業が行われた。4年生の担任は、2020年度にも、A小学校の4年生の担任をしていた。そのため、前田と4年生の担任は、2020年度の総合的な学習の時間の反省点を踏まえて、改善案を出し合いながら、2021年度の学習活動を指導した。

1) ホタルについての調べ学習（4月、8時間、「知る」）

2021年4月の初めの総合的な学習の時間の授業において、4年生の児童は、ホタルについて疑問に思うことを出し合った。児童は、「なぜ、きれいな川にしかホタルは住めないのか」、「ホタルが光るのは、体がどんな構造になっているからか」、「ホタルはどのように成長していくのか」などといった疑問について、グループに分かれて、本やインターネットで調べて、その調べたことを発表した。

2) 川の環境を守るための取り組み（5～6月、4時間、「考える」）（7月、10時間、「創る」、「伝える」）

5月21日、児童は、きれいな川にしか住めないホタルを増やすために自分たちができることを発表し合い、今後の活動について考えた。児童は、保護者に知らせる「ホタル新聞」作りや、川を汚さない廃油石けんづくりに挑戦することにした。

6月10日、市の環境保全課の職員による出前授業が行われた。その職員の指導のもと、児童は、地域の川の水質検査を実施した。児童は、少しの水の濁りであっても、数値にすればとても水質が悪くなることや、水をきれいにするには驚くほどたくさんの水を必要とすることを知った。前田は、児童が、地域の川が、どこを流れて海にたどりつくのかを地図で確認したり、川の環境や地球温暖化についても学んだことで、それらの環境の問題を、自分事として捉えることができるようになったと考えた。児童は、「（環境の問題を）自由研究のテーマにしたいと思いました」との感想を出した。このことから、前田は、この学習活動により、児童が、自分の力でもっとやってみたいという意欲を高めたと考えた。

児童は、ホタルについて調べたことや出前授業で教わったことを、グループごとに記事にして、新聞を作成した。児童は、その新聞を廊下にある4学年の掲示板に掲示するとともに、印刷をした上で4年生の全家庭に配布した。さらに、児童は、1か月間、水を汚さないために自分で決めた活動を家庭で実践する「エコチャレンジ」に挑戦した。児童は、家族とともに水を汚さないための活動の大切さについて考えながら「エコチャレンジ」を続けることができた。前田は、児童が、この活動を通して汚れた生活排水を減らす取り組みを多くの人に知ってもらい、広めていきたいという思いを強くすることができたと考えた。

児童は7月に廃品回収で集まった廃油を使って、石けんを作り、それを家に持ち帰った。児童は、「油は流し台に捨てると川を汚す原因になる。だが、油をゴミにしない工夫をすると有効に使うことができること」を学んだ。児童のうちの1人は、この学習で感じたことについて「前はめんどくさいという気持ちでやっていたけど、勉強してから環境への取組が楽しくなりました」と書いた。このことから、前田は、児童が自分にできる小さな取り組みの積み重ねが、世界の環境保全につながることを自覚できたと考えた。

3) 児童による1学期の学習活動の振り返り（7月、1時間、「省みる」）

7月の最後の授業で、児童は、1学期の活動を付箋に記した。その上で、「自分」と「グループ」、「よかったこと・ためになったこと」と「うまくいかなかったこと」の2軸で分けた概念化シートに、それらの付箋を分類して、1学期の学習での学びを振り返った。付箋には、「川の水を汚しているのは、ほとんどが生活排水だと知ってこれから気をつけたいと思いました」や、「ホタルは成虫になると水しか飲まないの、川をきれいにして増やしていきたいです」といった記述が見られた。

これらのことから、前田は、児童が、ホタルの生態をよく知って、きれいな川にしか住めないホタルのいる自

分たちの地域に誇りを持つことができたと考えた。また、前田は、児童が、自分にできる環境に対する取組や、ホテルを地域に増やすための活動を、地域の人と一緒に実践しようとする中で、その取り組みを自分事として考えることができるようになってきたと考えた。

前田は、児童が、自分の行動で川の水質が変わることを認識することを通して、自分にできることを少しずつでも続けていかなければいけないという気持ちが生まれたのではないかと考えた。また、前田は、児童が、そうした気持ちを持ったことにより、やってみようとする気持ちを高めたのではないかと考えた。

4) ホテルのいる町にするための取り組み(9～10月, 12時間, 「知る」, 「考える」)(11～12月, 30時間, 「創る」 「伝える」)

2学期には、児童は、ホテルの餌になるカワニナについて知りたいことを出し合った。「何を食べるのか」「どのくらい生きるのか」「成長の仕方」「冬はどうしているのか」などについて、タブレットで調べ学習を行い、調べた結果を共有した。児童は、カワニナがホテルよりも長生きすることや、水温が10度以上なら冬でも冬眠しないで活動することを知り、驚いていた。

また、児童は、ホテルの保全活動をしている地域の団体の代表に質問したいことを出し合った。さらに、この団体と一緒にやってみようという趣旨をいくつか挙げて、児童から提案することになった。

この団体の代表は、この団体は、昔の青年団の人たちが自分たちの力でもっと地域をよくしていこうと立ち上げた団体であることを児童に説明した。代表は、児童の質問に対して、仲間と同じ目標を持って取り組むために大切なのは、人任せにせず、まず自分が動くことだという趣旨のことを述べた。

児童と、この団体は、児童の提案のうち、①団体の常時活動であるカワニナの採取と放流を行うこと、②団体がその年に取り組む予定でもあったホテルの看板のデザインを考案すること、に共に取り組むことになった。

10月7日、児童は、団体の住民4名の協力のもと、カワニナを採取するため、それが多く生息する川下へ行った。児童は、カワニナを採取し、その多さに驚いていた。児童は、そのカワニナをホテルのいる川に放流した。50匹ほどのカワニナはA小学校の玄関にある水槽で飼育された。4年生の児童は、他の学年の児童にもカワニナのことを知ってもらうようにするために、水槽の横に、カワニナについて調べたことを絵や文でまとめた説明書きを置いた。水槽では、カワニナに興味深そうに観察する児童の姿が見られた。

11月12日、児童は、団体の代表に対して、ホテルの看板について提案した。児童と代表は、「この地域はホテルが飛んでいてとてもきれいなこと」、「川を汚さないようにしてホテルを増やしたいこと」を、看板を見た人に伝えることを共通理解した。また、児童は、他の地域のホテルについての看板を参考にしながら、伝わりやすい看板にするための工夫を発表した。代表は、「ホテルを大きく表現して目立つようにする」、「ホテルの活動時間などの知識を伝えて興味を持ってもらう」などの児童のアイデアを褒めた。児童と代表は、さらに意見を出し合った。児童は、ホテルのキャラクターを作ると、住民も親しみをもって一緒にホテルを守っていこうと思うのではないかと考えた。

前田は、児童が、これらの学習活動を通して、ホテルの保護活動を、他の学年の児童も巻き込みながら、学校全体で取り組む意欲を高めたと考えた。

(2) 5年生に対する授業実践

2020年度まで、5年生は、住民から借りた農地で野菜を育てていた。しかし、継続して野菜の世話をすることは、担任や住民の負担になっていた。また、**COVID-19**の影響により、児童が育てた野菜を調理したり食べたりすることができなくなった。これらのことから、2021年度のテーマは「食」から「動物園」へと変更された。

5年生については、担任がT1、前田がT2として、総合的な学習の時間の授業が行われた。前田は、グループ活動における児童の様子を見取り、できたことや課題となったことを授業後に担任と話し合った。また、児童が企画する際に思考の助けとなるワークシートを作成した。さらに、前田は児童のチームから出た意見を整理して、児童が主体的に行動できるよう企画の方向付けを行った。

1) 動物園をいろいろな世代の人が楽しめる場所にするための企画づくり(4～6月, 10時間, 「知る」)(6月, 3時間, 「考える」)(6月, 10時間, 「創る」)

4月28日、児童は、「動物園をいろいろな世代の人に楽しんでもらえる場所にしよう」という課題を設定した。児童は、家族に対して動物園に関する調査をしたり、動物園のパンフレットやホームページで動物園の取り組み

を知ったりして、自分なりの動物園像をもった。児童は、動物園をいろいろな世代の人に楽しんでもらえる場所にするための取り組みについて、アイデアを発表しあった。児童は、出たアイデアの中から、「限定ランチ・スイーツ撮影スポット」「動物園クイズ」「動物園キャンプ」「スタンプラリー」「宝探し」「散歩コース」の企画をすすめていくことにした。

5月14日、担任と前田は、動物園の学芸員に5年生のこの学習の目標や児童から出たアイデアを伝え、児童が提案した企画に対する意見をいただけるようお願いした。

6月3日、動物園での企画を、お年寄りにも安心して参加してもらえるような企画にするために、地域包括支援センターの職員が、児童に対して、お年寄りの体と心の変化や、児童にもできるお年寄りへの手助けについて話をした。職員は、児童の企画に関する質問にも回答した。前田は、これにより、お年寄りが楽しめるような企画にしていこうとする児童の意欲が高まったと考えた。

6月16日、各児童のチームの企画をより具体的にするために、児童は、動物園の園内を歩いて、動物や施設を見学した。学芸員は、児童に対して、来場者を増やして多くの人に楽しんでもらうことをやりがいと感ずることや、お年寄りが孫と一緒に楽しめる工夫をしていきたいことなどを語った。こうした学芸員の願いは児童の願いと共通していた。そのため、前田は、児童がこの話を聞いて、企画をすすめる意欲を高めたと考えた。

児童は、動物園の特長をよりアピールしていきたいとの動物園の意向を受け、その特長を企画に生かしていくために、チームでアイデアを出し合うことにした。児童は、学芸員からのアドバイスを受け、KJ法で、「わかったこと・企画に生かしたいこと」「わからないこと・これから考えること」を出し合い、企画の何を改善すべきかについてグループで考えをまとめた。

2) 学芸員に対する企画の提案（6月、6時間、「伝える」）

6月24日、児童は、zoomを用いて、チームごとに、企画の内容、準備物、魅力などを学芸員に提案した。学芸員は、それぞれのチームの提案に対して、アイデアを褒めた上で、丁寧に感想や助言を述べた。前田は、これにより、児童が自信をもつようになったと考えた。児童による振り返りには、「動物本来の特徴を考えてキャラクター作りをしたい」「小さい子とお年寄りがいっしょに活動する機会になるように、コースを分けないようにしたい」など、学芸員からの助言を具体的な取り組みに生かしていこうとする記述が見られた。これらのことから、前田は、児童がこの学習活動により、たくさんの人に楽しんでもらう動物園にするために貢献したいと、より強く思うようになったと考えた。

3) 児童による1学期の学習活動の振り返り（7月、3時間、「省みる」）

7月14日、児童は、一学期の学習の振り返りとして、自分やチームについて「よかったこと」「うまくいかなかったこと」を付箋に書いて出し合った上で、二学期からすることを明確にした。

付箋には、「プレゼンの準備や練習をチームで協力して行うことができ、学芸員さんに意見をもらえたことがうれしかった」「まだ、十分調べられてないことや、動物園で詳しく見られなかったことがある」との記述が見られた。また、課題について付箋には、「作業の分担がうまくいかず時間がかかった」「意見のすれ違いから話し合いがうまく進まなかった」との記述が見られた。

児童はこれらのことを受け、宝探し、スタンプラリー、クイズ、ウォーキング、フォトスポットのチームは協力して、参加者が同時にイベントを楽しめるように工夫すると、準備についても協力し合えるのではないかと考えた。2学期にすることを共有できたことにより、児童の中には、夏休み中や週末に自発的に動物園を訪れて、動物園のことを調べた者もいた。

4) covid-19の影響による企画の修正（9月、10時間、「考える」「創る」）

夏休み中に、担任と前田、学芸員は、5年生の総合的な学習の時間に関する打ち合わせを実施した。covid-19の感染が拡大していたことを受け、今後はcovid-19の感染が拡大したとしても実施可能な企画にしていこうと、10月14日に児童による2回目の学芸員への提案を行うことが決まった。

これにより、動物園キャンプを企画した児童のチームは、それを実施することができなくなった。担任のアドバイスにより、このチームは、動物園の動物と触れ合えるエリアで、より動物と仲良くなれるアイデアを提案することにした。レストランのメニュー開発を企画したチームは、利益が出るような提案をすることが難しいため、担任と協議の上、レストランの店員にインタビューを行ったことを生かして、クイズを作り、景品を用意して集

客する内容へと企画を変更した。

5) 2回目の学芸員に対する企画の提案(10月, 6時間, 「伝える」「省みる」)

10月14日, 児童は, zoomを用いて学芸員に対して2回目の企画の提案を行った。学芸員は, 各チームの児童の提案に対して主に次のような7点の趣旨の意見や質問を述べた。

第一に, フォトスポットの企画を提案したチームに対しては, 主に次の5つの趣旨の意見や質問が述べられた。①フレームや手持ちの絵を入り口や広場に集めて置くのではなく, その動物がいる場所に置いてはどうか。②フレームは, みんなが触るので, 感染対策の消毒の仕方を決めておくと良い。③手持ちの絵が汚れたり, 風で飛んだりしないようにするにはどうするのか。④写真の撮り方を説明するために, 実際にやってみて説明のポスターを作ると良い。⑤新しくチームで考えた動物のキャラクターに, 表情をつけると, より親しみがわくのではないか。

第二に, 動物園のふれあいコーナーの企画を提案したチームに対しては, 主に次の3つの趣旨の意見が述べられた。①動物が疲れないように, 遠足でたくさんの児童が来園したときに, ふれあう人をうまく分散させると良い。②羊の毛を溶かす体験など, 動物に触るだけでない活動も考えるとよりよい。③映像にしてホームページに載せるなど, 飼育員などがその場になくても説明できる方法を考えるとよりよい。

第三に, レストランの企画を提案したチームに対しては, 主に次の3つの趣旨の意見や質問が述べられた。①クイズの景品のシールに, 今, この動物園にいる動物の名前を入れると, よりこの動物園らしさが出る。②クイズの全問正解者だけに, プレゼントを渡すのか。それとも参加者みんなにプレゼントを渡すのか。③ポスターを作って, 動物園やレストランの入り口にそれを掲示すると, クイズの企画を宣伝できる。

第四に, 園内の散歩の企画を提案したチームに対しては, 主に次の2つの趣旨の意見や質問が述べられた。①マップにクイズとなぞなぞの両方がある。どちらの問題なのかがわかるようにすると, よりよい。②参加者に渡す賞状について, 一人一人の名前を書かなくても良い方法を考えると, よりよい。

第五に, 宝箱の企画を提案したチームに対しては, 主に次の2つの趣旨の意見や質問が述べられた。①景品について, 大人向けに, 動物の普段見えないしぐさの写真をプレゼントしてはどうか。②宝を見つけた人は, 一か所のみ宝しかもらえないのか。それとも見つけた全ての場所の宝をもらえるのか。

第六に, スタンプラリーの企画を提案したチームに対しては, 主に次の2つの趣旨の意見が述べられた。①スタンプは, 木製で薄いので, 消毒しやすいように持ち手をつけるとよりよい。②インクとスタンプを置く台を準備するとよりよい。

第七に, クイズの企画を提案したチームに対しては, 主に次の趣旨の意見や質問が述べられた。①答えがいくつも考えられるものは, 問題にしにくいので, 出し方を工夫するとよりよい。②答えの選択肢の幅がせまいので, もっと極端にすると, よりよい。③「この動物のおやつ時間はいつか。」「この動物は何本足で立つか。」などといったクイズはどうか。

このように, 学芸員は, 5年生に対して, 児童が動物園の企画を実施することを前提にした厳しい質問や意見を出していた。

6) さらなる企画の修正(11月~12月, 10時間, 「考える」, 「創る」)

10月27日, 児童は, 学芸員からの意見や質問を受け, 改めて各チームの企画を見直し, 「できていること」と「これからすること」を共有した。児童は, 今までの活動を整理して, 「何からすべきか」, 「それをどう分担してすすめるか」などについて, もっと具体的に考えなくてはならないことを確認し合った。

(3) 6年生に対する授業実践

2020年度には, 総合的な学習の時間において, 6年生は, 仕事について調べたことや, その職業の方に話を聞いたことを, 児童が個人でまとめるキャリア教育を行っていた。2021年度には, 児童が, 地域の課題解決に向けて他の児童や住民と共に取り組むことで, 自らの生き方や地域の未来について考え, 住民へ発信できるように, 総合的な学習の時間の計画を変更した。児童は, 住民と「住民が集い共に活動できるまち」をめざすために, 自らができることを考えて発表した。児童は, 家族にも聞き取りをして出たアイデアの中から, 自分たちが準備したりお願いしたりできる取り組みや, 三世代の人を楽しめる取り組みに絞り, オープンスクールで住民にも参加してもらえるイベントを行うことになった。

6年生については、前田がT1,担任がT2として、総合的な学習の時間の授業が行われた。6年生の活動はグループ活動が多い。そのため、児童は、2つの教室に分かれて学習をすすめた。2人の教師は、それぞれの教室に分かれて、児童への助言や見取りを行った。前田が、授業の計画を立案した。前田は、担任と話し合いながら各授業の振り返りと改善を行った。担任は、児童が発表資料の作成や発表の練習を行う時に、国語科と関連させながら児童を指導した。

1)「住民が集い共に活動できるまち」にするための企画づくり(4~6月,10時間,「知る」)(6月,8時間,「考える」「創る」)(7月,2時間,「伝える」)(7月,2時間,「省みる」)

6月3日,「住民が集い共に活動できるまち」にするための企画を,お年寄りにも安心して参加してもらえるようにするために,地域包括支援センターの職員が,児童に対して,お年寄りの体と心の変化や,児童にもできるお年寄りへの手助けについて話をした。職員は,お年寄りへの配慮に関する児童からの質問にも回答した。前田は,これにより,お年寄りが楽しめるような企画にしていこうとする児童の意欲が高まったと考えた。

児童は,グループに分かれ,企画の目的,内容,準備物,三世代の住民が楽しめる工夫などを話し合っ,企画の提案資料を作成した。6月17日,児童は,社会福祉協議会の職員と学校長に対して提案の発表を行った。社会福祉協議会の職員は,提案に対して意見を述べるとともに,民生委員として,どのように住民の間につながりをつくってきたのかについて,児童に話をした。児童は,ペアのグループ同士で,「よいと思ったこと」,「疑問に思ったこと」,「アドバイス」の3点について意見を交換しあった。

7月15日,児童は,幼稚園をカフェにして,住民同士の交流の場をつくっているコミュニティセンターの住民から,イベントを企画する際の心構えや準備についての話をきいた。その住民は,イベントをスムーズにできるように役割分担をしておくべきだが,何を聞かれてもチームのみんながわかるようにしておく必要がある旨の話をした。また,そうすることによって,自分のチームの企画に責任を持つことだけでなく,自分一人ですべてをやろうとせずに,仲間を信じて力を借りることが重要である旨の話をした。さらに,計画の段階でイベント当日のハプニングを想定して,いろいろなパターンを考えておくと,すぐに対応できる旨の話をした。また,「来てくれた人に笑顔で挨拶することで,来てよかったと思ってもらえる」旨の話をした。

1学期の学習の振り返りでは,「地域のために頑張っている人たちに会えて話を聞けたことがよかった」という児童の意見が見られた。このことから,前田は,児童が,1学期の学習によって,自分も地域のためにできることをしたいという思いを強くすることができたと考えた。

2) covid-19の影響による企画の修正(9~10月,15時間,「考える」「創る」)

7月下旬頃から covid-19の感染が拡大していたことを受け,オープンスクールにおいて,6年生が対面のイベントを開催することが難しくなった。11月4日のオープンスクールは,保護者だけが参加できる参観日に変更されることになった。前田は,夏休み中に担任や管理職と6年生の今後の学習活動について相談した。その結果,教師が,児童とともに感染対策を考えながら,それぞれのグループの企画を実施可能な形へと修正していくことになった。

前田は,感染対策に伴う児童の活動の制限により,各企画の実施についての児童の意欲が下がることを懸念した。そのため前田は,児童の取り組みを改めて価値づけることにした。前田は,新聞記事を活用して,児童に対して,covid-19の感染拡大により,高齢者の孤立がさらに進み,抑うつ症状が発生するリスクが高まることを懸念されていることを児童に説明した。また,児童が地域につながりを作ることは,地域で孤立する人たちの社会参加のきっかけになることを説明した。さらに,孤立対策としては,子どもとの交流が有効であることを説明した。加えて,児童が地域につながりを作ることは,お年寄りが健康で安心して生活することに寄与することを説明した。また,児童が今取り組んでいることは,社会科で学んだSDGsの目標の1つである「住み続けられるまちづくり」にもつながることを説明した。

9月から,児童は,covid-19の感染対策のため,計画してきたイベントを住民と直接,関わらなくても実施することができるように修正していくことになった。9月4日,児童は「やることリスト」を作成し,どんな準備を進めていけばよいかを書き出して,準備のスケジュールや役割を決めていった。

10月22日,児童は,学校長に対して,グループごとに,各企画の「タイトル,時間,場所,目的,内容,準備物,三世代が楽しめる工夫,コロナ禍でも実施できる配慮」をパワーポイントで発表した。

前田は,児童が,イベントの準備をしているうちに,ただ楽しいイベントにすればいいと考えるようになり,

住民同士のつながりをつくるというイベントの目的を意識しなくなっていると考えた。そのため、10月29日に、前田は「参観日に参加した保護者がどう思ったら企画は成功だと言えるのか」について児童に発問した。すると、児童は、保護者が「他の参加者と話すきっかけができた」と思ってくれたら成功と言える、との趣旨のことを述べた。そこで、児童は、保護者に対するアンケートを実施することにより、保護者が各企画に参加することによって「話すきっかけができた」かどうか、などを測ることにした。

3) 「住民が集い共に活動できるまち」にするための企画の実施（11月、4時間、「伝える」）

11月4日の参観日の直前や当日に、各チームの児童は以下の企画を実施した。

松ぼっくりのクリスマスツリーをつくるイベントを計画した児童のチームは、コミュニティセンターの住民のアドバイスを生かして、材料をひとまとめにしたキットを作り、A小学校の低学年の児童を中心に配布した。キットには、クリスマスツリーの作り方などを書いた説明書を入れるなどして、低学年の児童とその保護者が、一緒にクリスマスツリー作りを楽しめるように工夫した。また、校区内にある子ども園にも依頼して、年長児に松ぼっくりツリーの作成をしてもらい、その写真を交換して掲示し合うことで、園児とその保護者同士が交流できるようにすることを考えた。

ペットの紹介を通して、住民同士の交流のきっかけをつくる企画を考えた児童のチームは、各学級を訪問してペット紹介カードを希望する児童に配ったり、学校の廊下の掲示板における掲示で児童に企画を周知したりすることを通して、ペットの紹介に参加する児童を募集した。

お化け屋敷迷路を企画していた児童のチームは、感染症対策のため、校内に迷路を作ることができなくなった。その代わりに、地域に残る不思議な話や珍しい話を集めて、地図上にまとめて、それを校内に掲示した。

野外でのピザづくりを企画したチームは、感染対策のため、ピザを学校で販売することができなくなった。その代わりに、チームにいる児童の保護者が営んでいるパン屋の協力を得て、その店で児童が考えたピザを販売してもらうようにした。このチームの児童は、参観日当日には、校内にポスターを掲示して、お店でピザを販売することを宣伝した。児童の考えたピザは、2日間のみの販売予定であった。しかし、11月の毎週土曜日にも、それを販売していただけることになり、多くの住民がそれを食べた。

クイズラリー式ビンゴを企画した児童のチームは、感染対策のため、学校にまつわるクイズを置く場所を、校舎の周りへと変更した。前田は、他学年の児童が、このクイズに多数参加して楽しんだことが、このチームの児童の達成感につながったと考えた。

参加者に対するアンケートを集計した結果、保護者28名と住民4名のうち、約98%の人が、「このイベントで地域の人や保護者の方と話すきっかけができましたか」との問いに対して、「はい」に○をつけた。約2%の人は、「いいえ」に○をつけた。保護者がアンケートに記述した感想の中には、世界中の人々が制約や我慢をしなければいけないことも多い中、6年生がよく考えて工夫し前向きにがんばっていることをうれしく思い、保護者同士が話をするきっかけになった旨の記述が見られた。

4) 児童による学習の振り返り（11月、2時間、「省みる」）

児童は、参加者に対するアンケートの言葉や参加者が楽しんでいる様子を見て、自分の力で地域につながりをつくることができたかと振り返った。しかし、**COVID-19**のため、児童が考えていた企画を大きく変更しなくてはならなかった。そのため、「感染対策をもっと工夫すれば、やりたかったイベントができたのではないか」、「本当につながりを必要としているお年寄りとの交流ができていないのではないか」という意見も、児童から出た。そこで、児童は12月から、「どのようにしたら、住民同士のつながりをつくることができるのか」をさらに考えていくことにした。

5 児童の挑戦する意欲と社会的有効性意識の変容

(1) 児童の挑戦する意欲の変容

1) 4年生の挑戦する意欲の変容

表1は、A小学校の4年生に対して、2021年3月（調査時点で3年生）と11月に実施した質問紙における「挑戦する意欲」に関する4つの質問項目の結果を比較したものである。回答について「よく当てはまる」を4点、「少し当てはまる」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「全く当てはまらない」を1点とした。「挑戦す

る意欲の平均」は、4つの質問項目の平均値を算出したものである。4年生に対して3月に実施した調査のデータで「挑戦する意欲」の α 係数を算出したところ、.85と十分な値が得られた。

表1から、3月から11月にかけて、4年生の「挑戦する意欲」に関する質問項目の平均値が向上していることがわかる。このことから、4年生が取り組んだ総合的な学習の時間における地域課題解決学習は、児童の挑戦する意欲を高めたと言える。

表1 4年生の挑戦する意欲の変容

質 問 項 目	2021年3月			2021年11月			t検定結果
	平均値	SD	N	平均値	SD	N	
いろいろなことに挑戦してみたい	3.24	0.70	21	3.58	0.65	24	
難しいことでも自分の力をせいっぱい出して頑張ってみようと思う	3.43	0.60	21	3.46	0.93	24	
やろうとしたことは何でも一生懸命やりたい	3.14	0.83	22	3.50	0.78	24	
うまくいくかどうかは気にしないで一生懸命がんばりたい	3.10	0.89	21	3.21	0.78	24	
「挑戦する意欲」の平均	3.24	0.51	21	3.44	0.64	24	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

2) 5年生の挑戦する意欲の変容

表2は、A小学校の5年生に対して、2021年3月（調査時点で4年生）と11月に実施した質問紙における「挑戦する意欲」に関する4つの質問項目の結果を比較したものである。5年生に対して3月に実施した調査のデータで「挑戦する意欲」の α 係数を算出したところ、.78と十分な値が得られた。

表2から、3月から11月にかけて、5年生の「挑戦する意欲」に関する質問項目の平均値が向上していることがわかる。このことから、5年生が取り組んだ総合的な学習の時間における地域課題解決学習は、児童の挑戦する意欲を高めたと言える。

また、「いろいろなことに挑戦してみたい」および、「挑戦する意欲」の平均については、t検定の結果、5%水準で有意差が見られた。このことから、A小学校の5年生が経験した総合的な学習の時間における地域課題を解決する学習は、他校においても、5年生の児童の「挑戦する意欲」を高める可能性があると言える。

表2 5年生の挑戦する意欲の変容

質 問 項 目	2021年3月			2021年11月			t検定結果
	平均値	SD	N	平均値	SD	N	
いろいろなことに挑戦してみたい	2.96	0.79	28	3.46	0.69	28	*
難しいことでも自分の力をせいっぱい出して頑張ってみようと思う	3.18	0.72	28	3.50	0.58	28	
やろうとしたことは何でも一生懸命やりたい	3.19	0.83	27	3.32	0.82	28	
うまくいくかどうかは気にしないで一生懸命がんばりたい	2.93	0.86	28	3.25	0.84	28	
「挑戦する意欲」の平均	3.06	0.63	27	3.38	0.47	28	*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

3) 6年生の挑戦する意欲の変容

表3は、A小学校の6年生に対して、2021年3月（調査時点で5年生）と11月に実施した質問紙における「挑戦する意欲」に関する4つの質問項目の結果を比較したものである。6年生に対して3月に実施した調査のデータにおける「挑戦する意欲」の α 係数は.59であった。このことから、6年生については、「挑戦する意欲」の内的整合性はあると言える。

表3から、3月から11月にかけて、6年生の「挑戦する意欲」に関する質問項目の平均値は、同じ、または減少していることがわかる。このことから、6年生が取り組んだ総合的な学習の時間における地域課題解決学習は、児童の挑戦する意欲を高めなかったと言える。

表3 6年生の挑戦する意欲の変容

質 問 項 目	2021年3月			2021年11月			t検定 結果
	平均値	SD	N	平均値	SD	N	
いろいろなことに挑戦してみたい	3.35	0.77	34	3.29	0.72	34	
難しいことでも自分の力をせいっぱい出して頑張ってみようと思う	3.18	0.80	34	3.18	0.67	34	
やろうとしたことは何でも一生懸命やりたい	3.26	0.71	34	3.15	0.74	34	
うまくいかどうかは気にしないで一生懸命がんばりたい	3.09	0.90	34	3.00	0.82	34	
「挑戦する意欲」の平均	3.22	0.67	34	3.15	0.57	34	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

(2) 児童の社会的有効性意識の変容

1) 4年生の社会的有効性意識の変容

表4は、A小学校の4年生に対して、2021年6月と2022年2月に実施した質問紙における社会的有効性意識の結果を比較したものである。回答について「よく当てはまる」を5点、「少し当てはまる」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「まったく当てはまらない」を1点とした。「社会的有効性意識の平均」は、6つの質問項目の平均値を算出したものである。4年生に対して6月に実施した調査のデータで「社会的有効性意識」の α 係数を算出したところ、.83と十分な値が得られた。

表4から、2021年6月から2022年2月にかけて、質問項目によっては、平均値が減少している項目が1つ、わずかに減少している項目が1つ見られるものの、4年生の社会的有効性意識の平均値は、向上していることがわかる。このことから、4年生が取り組んだ総合的な学習の時間における地域課題解決学習は、児童の社会的有効性意識を高めたと言える。

表4 4年生の社会的有効性意識の変容

質 問 項 目	2021年6月			2022年2月			t検定 結果
	平均値	SD	N	平均値	SD	N	
私は、地域の問題を解決していくことができると思う	3.28	1.06	25	3.36	1.11	25	
私は、地域の人々の暮らしを良くするために大きな役割を果たすことができると思う	3.20	1.26	25	3.00	1.19	25	
私は、地域の人々の暮らしを変えていくことができると信じている	3.44	1.26	25	3.52	1.12	25	
もし私が、世の中を少しでも変えることができれば、より正しい世の中にあることができると思う	3.16	1.21	25	3.52	1.12	25	
多くの人は、地域の問題を解決していくことができると思う	4.08	1.04	25	4.04	1.06	25	
私はよく未来の世界をよりよいものにするためにはどうしたらよいか考える	3.08	1.22	25	3.60	1.00	25	
社会的有効性意識の平均	3.37	0.87	25	3.51	0.90	25	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

2) 5年生の社会的有効性意識の変容

表5は、A小学校の5年生に対して、2021年6月と2022年2月に実施した質問紙における社会的有効性意識の結果を比較したものである。5年生に対して6月に実施した調査のデータで「社会的有効性意識」の α 係数を算出したところ、.84と十分な値が得られた。

表5から、2021年6月から2022年2月にかけて、平均値がわずかに減少している項目が1つ見られるものの、5年生の社会的有効性意識の平均値は、向上していることがわかる。このことから、5年生が取り組んだ総合的な学習の時間における地域課題解決学習は、児童の社会的有効性意識を高めたと言える。

表5 5年生の社会的有効性意識の変容

質 問 項 目	2021年6月			2022年2月			t検定 結果
	平均値	SD	N	平均値	SD	N	
私は、地域の問題を解決していくことができると思う	3.39	1.10	28	3.50	1.20	28	
私は、地域の人々の暮らしを良くするために大きな役割を果たすことができると思う	3.21	1.10	28	3.50	1.07	28	
私は、地域の人々の暮らしを変えていくことができると信じている	3.50	1.35	28	3.64	1.16	28	
もし私が、世の中を少しでも変えることができれば、より正しい世の中にするができると思う	3.39	1.45	28	3.64	1.06	28	
多くの人は、地域の問題を解決していくことができると思う	4.11	0.96	28	4.07	1.05	28	
私はよく未来の世界をよりよいものにするためにはどうしたらよいか考える	3.61	1.10	28	3.79	1.03	28	
社会的有効性意識の平均	3.54	0.89	28	3.69	0.78	28	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

3) 6年生の社会的有効性意識の変容

表6は、A小学校の6年生に対して、2021年6月と2022年2月に実施した質問紙における社会的有効性意識の結果を比較したものである。6年生に対して6月に実施した調査のデータで「社会的有効性意識」の α 係数を算出したところ、.73と十分な値が得られた。

表6から、2021年6月から2022年2月にかけて、6年生の社会的有効性意識の平均値は、わずかに減少していることがわかる。このことから、6年生が取り組んだ総合的な学習の時間における地域課題解決学習は、児童の社会的有効性意識を高めなかったと言える。

表6 6年生の社会的有効性意識の変容

質 問 項 目	2021年6月			2022年2月			t検定 結果
	平均値	SD	N	平均値	SD	N	
私は、地域の問題を解決していくことができると思う	3.18	0.95	33	3.24	0.90	33	
私は、地域の人々の暮らしを良くするために大きな役割を果たすことができると思う	3.09	1.04	33	2.94	0.86	33	
私は、地域の人々の暮らしを変えていくことができると信じている	3.58	1.09	33	3.45	1.03	33	
もし私が、世の中を少しでも変えることができれば、より正しい世の中にするができると思う	3.73	1.04	33	3.64	0.90	33	
多くの人は、地域の問題を解決していくことができると思う	3.88	0.74	33	4.00	0.87	33	
私はよく未来の世界をよりよいものにするためにはどうしたらよいか考える	3.48	1.15	33	3.58	1.06	33	
社会的有効性意識の平均	3.49	0.66	33	3.47	0.54	33	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

6 考察

以上の通り、4年生と5年生は、総合的な学習の時間における地域課題を解決する学習を通して、挑戦する意欲や、社会的有効性意識を高めていた。それに対して、6年生は、総合的な学習の時間における地域課題を解決する学習を通して、挑戦する意欲や、社会的有効性意識を高めてはいなかった。

4,5年生と6年生のそれらの変容の差を生み出した要因は多々あると考えられるが、次の2点が主要な要因であったと考える。

第一の主要な要因は、児童が地域の課題解決に取り組む住民と共に、その解決に継続的に取り組んだ程度の差である。

4年生と、ホタルの保全活動をしている住民の団体は、①団体の常時活動であるカワニナの採取と放流を行う

こと、②団体がその年に取り組む予定でもあったホテルの看板のデザインを考案すること、に共に取り組んだ。

5年生と、地域の動物園の学芸員は、「動物園をいろいろな世代の人に楽しんでもらえる場所」にするための企画の立案に共に取り組んだ。とくに2回目の児童による発表と学芸員による質疑応答や意見交換では、学芸員から、児童が動物園の企画を実施することを前提にした厳しい質問や意見が出されていた。

これらのことから、4年生と5年生は、地域の課題解決に取り組んでいる住民と共に、その解決に継続的に取り組んだことにより、課題に挑戦する意欲や、地域の課題を解決できるという認識を高めたと考えられる。

一方、6年生は、「住民が集い共に活動できるまち」という住民が決めた地域の目標の達成のための企画を立案、実施してきた。その企画の質を高めるために、6年生は、社会福祉協議会の職員に、自分たちの企画の提案を発表して、それに対する意見をもらった。また、コミュニティセンターの住民からイベントを企画する際の心構えや準備についての話を聞いた。しかし、6年生は、社会福祉協議会の職員や、コミュニティセンターの住民と共に、継続的に、企画の立案や実施に取り組んではこなかった。

このことから、6年生は、地域の課題解決に取り組む住民と共に、その解決に継続的に取り組んでこなかったことにより、課題に挑戦する意欲や、地域の課題を解決できるという認識を高めなかったと考えられる。

第二の主要な要因は、児童が地域を直接、変えた学習経験の有無である。

4年生は、ホテルの保全活動をしている住民の団体と共に、ホテルのいる町にするために、地域の川で、カワニナを採取、放流した。また、4年生は、地域に立てかけるホテルについての看板の内容を企画して、それを地域団体の代表に対して提案した。その提案に対して、団体の代表は、4年生に意見を述べた。

このように、4年生は、住民と共に、カワニナを放流し、自分たちの考えた看板を設置するなど、地域の環境を直接、変えることに取り組んだ。4年生は、こうした地域の環境を直接、変える取り組みを経験することにより、課題に挑戦する意欲や、地域の課題を解決できるという認識を高めたと考えられる。

5年生は、「動物園をいろいろな世代の人に楽しんでもらえる場所」にするために、その動物園で実際に実施するイベントの企画の立案と、学芸員への提案に取り組んだ。その提案に対して、学芸員は、5年生に意見を述べ、質問した。

このように、5年生は、動物園で実際に実施するイベントを直接、変えることに取り組んだ。5年生は、こうした地域のイベントを直接、変えるための取り組みを経験することにより、課題に挑戦する意欲や、地域の課題を解決できるという認識を高めたと考えられる。

一方、6年生は、学校の中で、住民同士のつながりを形成するためのイベントを企画していた。しかし、**covid-19**の感染対策のため、6年生は、保護者以外の住民を、そのイベントに招待することができなかった。

このように、6年生は、地域の環境やイベントを直接、変えることに取り組んでこなかった。6年生は、学校の中でイベントを企画することで、間接的に、地域における住民同士のつながりを形成しようとしていた。しかし、学校の中でのイベントに住民を招待できなくなったことにより、間接的に、地域における住民同士のつながりを形成することも十分にはできなかった。これらのことから、6年生は、地域を直接、変える取り組みを経験しなかったことにより、課題に挑戦する意欲や、地域の課題を解決できるという認識を高めなかったと考えられる。

以上の本実践研究の結果から、ある条件下では、小学校において、教師が地域の課題解決を主な内容とする総合的な学習の時間のマネジメントとその授業実践を行うことが、児童の挑戦する意欲と社会的有効性意識を一定程度高めることが明らかになったと言える。その条件とは、児童が、地域の課題の解決に取り組む住民と共に、継続的に地域を直接、変える経験をするることである。

日本の社会的、経済的諸問題を解決していく上で、課題に挑戦する高い意欲や社会的有効性意識を持った人間を、学校教育において意図的、計画的に育成していくことは重要である。本実践研究は、小学校の総合的な学習の時間において、児童が地域の課題解決に取り組む住民と共に、継続的に地域を直接、変える経験をするのが、そうした人間を育成する上で有効であることを明らかにした。また、そうした人間を育成する総合的な学習の時間のマネジメントや授業実践を記述・説明した。これらの点に本実践研究の実践的意義があると考えられる。

また、小学校において、児童が地域の課題解決に取り組む住民と共に継続的に地域を直接、変える経験をするのが、児童の課題に挑戦する意欲や社会的有効性意識を高めることは、管見の限り、未だ解明されていない。本研究はこれを解明した点に一定の学術的意義があると考えられる。

ただし、本実践研究の対象となる児童数は、各学年ともに、20～30名程度にとどまった。また、5年生の「挑戦する意欲」を除き、実践の前後で児童の変容について有意差が見られなかった。そのため、本実践研究で得ら

れた知見を直ちに一般化することはできない。

今後の課題としては、より多くの児童を対象にした量的調査研究によって、本研究で得られた知見の妥当性を確認することが挙げられる。

謝 辞

本研究は、前田が、鳴門教育大学の教職大学院にて、現職院生として置籍校である小学校において実践してきた実践研究の成果の一部を加筆修正したものである。大林は、前田の主指導教員として、この実践研究の指導・助言に従事してきた。大林は、この実践研究の成果を踏まえて、本稿を執筆した。また、本研究はJSPS科研費(19K14240)の助成を受けて実施されたものである。

前田による実践研究に協力していただいた置籍校の児童、その保護者、教職員、地域住民の方々には、多大なご尽力を賜った。ここに御礼を申し上げる次第である。

文 献

青木多寿子, 中島恭兵「児童・生徒の向上心, 目標志向性に及ぼす“あこがれ”の影響」『学習開発学研究』(4), 2011年, 67-73頁

大林正史, 近藤千恵子「サービス・ラーニングによる生徒の主体性と社会的有効性意識の向上: 中学校の生徒会と住民による避難所生活の課題解決を通して」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』(36), 2022年, 99-109頁

唐木清志『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』東信堂, 2010年

木村充, 中原淳「サービス・ラーニングが学習成果に及ぼす効果に関する実証的研究: 広島経済大学・興動館プロジェクトを事例として」『日本教育工学会論文誌』36(2), 2012年, 69-80頁

佐古秀一『管理職のための学校経営 R-PDCA —内発的な改善力を高めるマネジメントサイクル』明治図書, 2019年

注

(1) 前田の実習における実践研究の目的は、「やってみよう」を実践できる児童を育成することであった。前田は、自らの実践が、児童の「やってみよう」を実践できる程度の変容に与える影響を測定するために、青木・中島(2011)の向上心尺度のうち、「意欲」と「やる気」の下位尺度で構成された質問紙調査を実践の前後で実施した。一方、前田の実習における実践研究の目的は、児童の社会的有効性意識を高めることではなかった。よって、社会的有効性意識の質問項目は、前田の実習における実践研究で使用する測定項目ではなかった。他方で、大林は、「1 研究の目的」に記した問題意識に基づき、前田の実習における実践が、児童の社会的有効性意識にも影響を与えるのではないかとの仮説を立てた。よって、大林は、前田に、「社会的有効性意識」を測定する質問紙調査を行うことを前田に依頼し、了承を得た。

Improving Children’s Willingness to Take on Challenges and Awareness of Social Effectiveness through solving the problems of the community — Through the Period of Integrated Study management and classroom practice —

OBUYASHI Masafumi*, MAEDA Ayako**

The purpose of this study is to examine the effects of teachers’ the period for the Period of Integrated Study management and class practice, which mainly focuses on solving the problems of the community, on children’s willingness to take on challenges and awareness of social effectiveness in elementary schools.

A graduate student who is also an elementary school teacher managed the Period of Integrated Study and practiced the lesson for about one year, mainly focusing on solving the problems of the community for 4th to 6th graders. A questionnaire survey was conducted before and after the practice to measure the children’s willingness to take on challenges and awareness of social effectiveness.

As a result, under certain conditions, it was found that, in elementary schools, teachers’ the Period of Integrated Study management and class practice, which mainly focuses on solving the problems of the community can increase children’s willingness to take on challenges and a sense of social effectiveness. The condition is that the children have the experience of directly changing to solve the problems of the community continuously together with the residents who work to solve the problems of the community.

*Naruto Univeristy of Education

**Tokushima Shinmachi Elementary School